

新連載
断章
旭川のアイヌ語
地名研究
①

明治三十三年九月二十日、北海道庁令六十一号により、石狩国上川郡に、神居村、旭川村、永山村の三村が初めて設置された。これが旭川の初出で、「旭川」は、忠別川のアイヌ語名「チュウペツ」(cup-pet 太陽・日・川)を意訳して名づけられた。

この説は、初代北海道庁長官・岩村通俊等の命で、アイヌ語地名を調査した永田方正の『北海道蝦夷語地名解』(明治二十四年刊行)の忠別川のアイヌ語地名解によったもの(他の根拠は割愛)。

「Chup-pet チュウペツ 東川

「チュウカベツ」二同ジ。此川ノ水源ハ東ニアリテ日月ノ出ル処故ニ名ツク。明治廿三年旭川村ヲ置ク。」

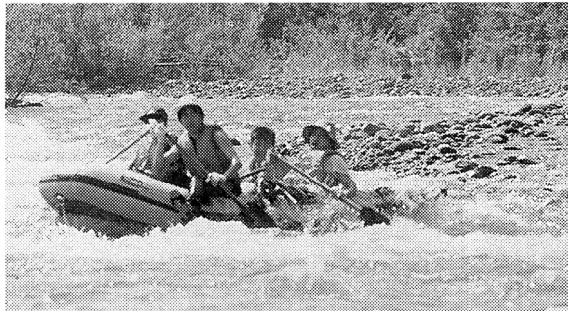
これに対し、明治三十八年、ジョン・バチエラーは、忠別川は「ウペツ」(Urip-pet 急なる河

「旭川」の地名起源

Current river)とあるとし、「ウペツ」は日本人により、チュウペツ、即ち「太陽の河の如く誤られたる為め旭川(昇る日の川)なる誤名を得たり」と、永田方正説を誤りと指摘した。

昭和三十三年に旭川市史第四巻の「上川郡アイヌ語地名解」で知里真志保が、「忠別川」「チュウペツ」(Chiu-pet 波・川)は「波だつ川」の義。それが後に民間語原解によって「チュウペツ」(Chup-pet

日・川)となり、意訳して旭川という地名が生れ、また、「チュウ」(chup 日)と「チュウカ」(chik 東)とを混同して東川などという地名も生まれた」とし、爾来、旭川では知里説が定着していた。



激流の忠別川を下る(船上右端が筆者)
=1988年夏

昭和五十九年に山田秀三は、『北海道の地名』で、ウペツは旧記・旧図には出てこそ、忠別川は旧記・旧図では、チュウ・ペツであるとし、「忠別太は鮭場所であった。チュウ・チュエ」(chuk-chiep 秋の魚・鮭)が秋になると盛んに上る川だったので、チュウ・ペツ(chiu-pet 秋・川)だったかも知れない」と書いた。私の調査でも同意見で、次回で触れたい。

右にみたように、忠別川のアイヌ語表記は三つあるが、「旭川」は、チュウペツ||チュウ・ペツ(cup-pet 太陽・日・川)の意訳から誕生した。近年、「チュウ・ペツ創作説」が出されたが、明治二十年内務省地理局発行の『改正北海道全図』が、忠別川を「チュウツペツ川」と表記、これがその後、北海道庁刊行物で採用されたことを、永田方正の名譽のために明記しておきたい。「ローマ字表記は原文によった」
高橋基・アイヌ語地名研究会幹事
(次回は2月5日号に掲載します)